

二次元的人間の予知夢

——アドルフ・ヒルデブランド——

金田 千秋

幾何学で補助線の発見が問題解決の端緒となるように、テキストの隠れた前提(つまり補助線)の発見が、アドルフ・ヒルデブランドの『形の問題』⁽¹⁾の解釈の糸口となる。ただ補助線は二本必要で、一つは内容理解のための内側の補助線であり、「数学者ヘルムホルツ」がそれに当たる。他の一つは、孤絶したこの書物にある思想系列に関係づける外側の補助線であって、本稿では「プロトナチス」がそれに当たる。『形の問題』の理解に必要な二本の線を引くことが本稿の目的である。まず内側の補助線の確認から始めよう。

第一章 二次元的人間

『形の問題』の内在的解釈のためにはすでにいくつかの補助線が提案されている。コンラート・フィードラーの芸術理論がそうだし、ヘルマン・ヘルムホルツの視覚生理学もそうである⁽²⁾。だが私は「数学者ヘルムホルツ」という新しい補助線をそこに付け加えたいと思う。

『形の問題』で特徴的なのは、それが造形芸術の本質を「レリーフ

に見た点にある。ヒルデブランドの主張はこうである。一般に造形芸術は三次元空間を二次元平面に畳み込む操作をかならず含むが、畳み込みの原理はレリーフ(浮き彫り)で尽くされている、だからすべての造形芸術は本質的にレリーフなのだ、と。だがいまから示すように、ヒルデブランドがその畳み込みに与えた解釈は、よしんばそれが生理学の言葉に彩られていようと、ヘルムホルツの数学思想抜きでは原理的に理解不可能なのである。

歴史的に見てレリーフと幾何学は深い関係を有している。たとえば十九世紀中葉のドイツにはレリーフの数学理論が存在しており、二つ例を挙げると⁽³⁾、シュタウデイグルの『レリーフ遠近法の基礎』(二八六八)や、ブリュッケの『造形芸術理論拾遺』(一八七七)の第二章「レリーフ遠近法」が代表的である。前者シュタウデイグルは、レリーフにはレリーフなりの遠近法原理が存在することを射影幾何学を援用して証明し、それを根拠にレリーフを正規の造形芸術として認定する。対して後者ブリュッケは、レリーフに遠近法のありえないことを数学的に証明し、それを根拠に「レリーフは造形芸術ではない」と断じたのである。ともに遠近法を造形芸術の至上命

題としつつ、結果的に正反対の結論に至ったわけだが、いずれにせよ十九世紀ドイツに「レリーフ幾何学」が存在したことはこれで確認できる。ただヒルデブラントはヴェルフリン宛ての書簡のなかで、先行世代の数学的芸術空間論に疑義を呈しているの^④、上記二つの研究はむしろ彼の反面教師だった可能性が高い。

さて十九世紀末、衰退期に入った射影幾何学と躍進を続ける微分幾何学の動向を睨みながら、少年期から数学に秀でた彫刻家ヒルデブラントは、自らの芸術空間論の構築のために数学的文献の渉猟に励んだと思われる。彼が通覧した可能性の高い資料を注の^⑤に掲げておく。

ところで彫刻家ヒルデブラントはヘルムホルツの生理学をどう評価していただろうか。それを知るうえで最良の資料は、一八七六年八月のフィードラー宛て書簡である^⑥。「ヘルムホルツ氏〔の論文〕をありがとう。やはり私の見込み違いでした。色についてはいいが、形 (Form) について〔ヘルムホルツ氏〕は問題が見えていません。両眼の視覚ではいつまでたつても形は生まれません。自然模倣の大切さを言うあたり、彼はナイーブですね」。フィードラーから送られた資料はヘルムホルツの『絵画の光学』(注5参照)と考えられるから、ヒルデブラントが芸術理論への応用という点でヘルムホルツ生理学に懐疑的だったことが分かる。

しかし刮目すべきは手紙の続きである。「以前読んだ幾何学の論文の方がずっと面白かった。芸術との絡みでもね (auch in Bezug auf Kunst)」。でも頭を整理するにはもう一度読まなきゃ(強調金田)。これは一八七六年の手紙だから、時系列的に見て、その中の「幾何学の論文」という言葉は注の^⑤の^①、つまりヘルムホルツの

一八七〇年の「幾何学的公理の起源と意味」を指すと見てよい。

一八七〇年の論文は有名な思考実験を含んでいる^⑦。それは「二次元の知覚しか持たない虫が卵の表面を這い回るとき、虫はどうやってその曲面構造を認識するのか」という思考実験である。ヒルデブラントが書簡で「幾何学の論文の方が面白かった」と言ったのは、当時、人口に膾炙していたこの「虫のエピソード」を指すと見てまず間違いない。そう考える理由はこうである。

ヘルムホルツの思考実験の眼目、「二次元の平面知覚しか持たない虫が三次元立体を知りうる条件は何か」という思考実験の眼目は、虫を口実に、それがいったん知覚を二次元に切り下げていること、そして二次元に切り下げたうえで、その二次元の視座から、もとの三次元世界を再構成しうるための数学的条件を探った点にある。だがヒルデブラントから見ればレリーフという造形システムはこの思考実験と類似性を持っている。なぜならレリーフもまた、人間の知覚をいったん平面知覚に限定し、その平面知覚だけでもとの立体世界を再構成するからである。

自然科学では十九世紀前半、「次元を下げる・次元を上げる」という手法はすでに学問的市民権を得ており、一九世紀中葉のヘルムホルツの数理物理学はその正統な継承者であったのだが、前掲のヒルデブラントの手紙は、十九世紀末に至って彫刻美学が数理物理学に追隨した経緯を伝えるように見えるのである。

ところでヒルデブラントが数学に長けていたことはすでに触れたが、では彼の哲学的能力はいかほどのものだっただろうか。

彼が少なくとも二次元的世界を哲学的に正しく理解していたことは、次の資料から分かる。一八九〇年代の未公開の原稿、「カント

の空間理解 (Kants Raumauffassung)」から引用する⁽⁸⁾。「視覚以外
の感覚がない場合、人は二次元の空間表象だけを持ち、人に許され
る空間表象は平面 (Fläche) のみとなるだろう。また人間の感覚機
能が一次元の把握に止まるなら、人間の空間表象は点 (Punkt) と
なるだろう。ところがカントは空間表象を当然のように三次元的と
想定し、その想定のもとで、人間の感覚は物を三次元的に把握する
とした。「だが」そうだとすると二次元的な感覚作用は起こらない
道理だが、しかし、二次元的感覚に対して二次元的空間表象が想定
または推論できる必然性を我々は実感している。なぜなら空間表象
と感覚経験は、人間の内的能力と外的世界の合作だからである」(強
調金田)。接続法で書かれた最初の傍線部は、実在するか否かは別
として、二次元の知覚世界が想定可能、推定可能であると彼が認識
していたことを物語っている。

ヒルデブラントは二次元的世界を数学的にイメージすることがで
きるだけでなく、それを哲学的に分析することもできる彫刻家だっ
たのである。

第二章 「次元を下げる」と「次元を上げる」

ところで次元を下げる行為には理論的だけでなく道徳的な意味合
いもある。ヘルムホルツのくだんの論文(一八七〇)を一八七六年
の英語訳で読んだイギリス人、アボット・アボットとヒントンは、
一八八四年、互いに独立に二次元的世界についての書物を著してい
る。内容は虫のエピソードの道徳化であって、風刺作家アボット・
アボットはこういう主旨の発言をしている。「現実の三次元的世界

は墮落している。しかしその彼方に道徳的な四次元的世界がある筈
だ。でも四次元への入り口が見つからない。そこで次元を一つ下げ
て、二次元的世界の住人が三次元的世界への入り口をどうやって見
つけるのかを調べてみよう。それが分かれば、それをヒントに三次
元的世界から四次元的世界への入り口も見つける道理だ」と。そ
で彼は二次元的人間の社会を階級、職業、性別等で幾何学的にモデ
ル化し、彼らが三次元的世界を推理する仕方を数学的かつ風刺的に
考察したのである。彼らの場合、SFは道徳的使命を帯びていた訳
である⁽⁹⁾。

さて「物を認識するために方法的に次元を下げる」という発想は
なにも十九世紀後半の発明ではなく、それはむしろ「輪切り技法」
の長い伝統に結びついている。対象を輪切りにする数学者アルキメ
デスの「求積法」も(古代ギリシア)、「水が抜けるにつれて水中の
物体が徐々に姿を現わす」というミケランジェロの観察も(ルネサ
ンス)、「すべての関数は無限個の三角関数の和に書き換えられる」
というフランス数学者フーリエの主張も(一八二二)、すべて、
面状に輪切りにすることで対象の本質理解を目指す点で軌を一にす
るのである。

ヒルデブラントが明示的に言及した輪切り技法はミケランジェロ
のそれである。『形の問題』の第七章段落十二でヒルデブラントは
こう言う。「大理石を削る作業の漸進的な進行過程をミケランジェ
ロはこう説明している。人物像が水のなかにあると想定すれば良い。
水を次第に抜いていけば、人体は少しずつ表面に現れ、最後に全身
が露出する」と。

ヴァザーリの伝えるミケランジェロの水抜きイメージと、ヘル

ムホルツの虫の思考実験には共通性がある。それはミケランジェロの水面にあの虫を浮かべてやればすぐに分かることである。栓を抜けば、下降する水面は物から刻々と面を切り取り、虫はその切り取られる二次元断面を刻々と知覚し、それらをまとめて虫は虫なりに人体を知覚するだろう。ミケランジェロの桶の物語とヘルムホルツの虫の物語は数学的に等価なのである。だが私がさらに確認したいのは、「ヒルデブラントも両者と等価な理論を展開している」という興味深い事実である。

(.i) 「次元を下げる」『形の問題』の第IV章でヒルデブラントはこう書いている¹⁰。「人間の表象が空間をとらえるのは、表象の視野を広くとつたうえで、その表象が奥行に向かつて進んでいくときである。ある物体がこの空間にあるということは、共通的な奥行運動 (allgemeine Tiefenbewegung) に対する抵抗者たちが、面現象群 (Flächenscheinungen) を構成し、それらが立ち退きを拒んでいるということに他ならない。しかし共通的な奥行運動さえあれば、面現象群に容量 (Volumen) が「一般的に」指定される。だが「個々の」面現象に明確なメルクマールが刻まれていて、奥行運動がそれを辿ることができるのなら、面現象群は「さらに」特定の容量を獲得する。それが立体的な形 (plastische Form) なのである」(強調金田)。

ヒルデブラントのこの議論はミケランジェロの洞察と同型である。最初に視野の全域を覆う面を考え、それが奥行運動をすると想定する。この運動面(つまり水面)が物体にぶつかれば切り口に面の現象を引き起こし、その引き起こされた面現象は奥行運動に対する抵

抗者のように見える。奥行運動が進むにつれて(つまり水面が降下するにつれて)、その物体をめぐって多数の面現象と多数の抵抗者が生成されるだろう。最終的に生成される、特定の物体をめぐる面現象の群、抵抗者の群が、ふつう我々が物体の容量と考えているもの、物体の立体的な形と思っているものをもう一度与えるというのである。だがこれは明らかに、物体が水で輪切りでき、輪切りの切り口が集積して最終的に立体的な形をもたらすという、あのミケランジェロの洞察の読み換えになっている。

(.ii) 「次元を上げる」しかしミケランジェロの話はまだ部分的である。なぜなら彼の言葉は、ものを輪切りにするところで、つまり三次元を二次元に切り下げるところで終わっていて、切り口を集積する行為については実質的に黙しているからである。しかしそこに踏み込むところにヒルデブラントの理論的独創性がある。彼は輪切りで得られた二次元の平面たちから、当初の三次元立体に復帰する過程に説き及ぶのであり、それが彼の空間理論の中核をなしている。『形の問題』の第V章段落二十三と二十四から引用する。「あるま

とまり (das Ganze) を立体的に (plastisch) 構築するとは、丸い (rund) 人体を「一つの」像現象 [平面現象] に置き換えることを意味する。立体的な形の統合過程の叙述は「面」現象からスタートするが、⁽¹⁾では目を転じて (umgekehrt) 立体的な形からスタートしてみよう。すべての立体的な個別の形はより大きな形に統合され、すべての個別の運動はより大きな全体運動の部分となり、最終的には、ある人体の全体的な形の豊かさのすべてが、可能な限り単純な面進行 (Flächengang) に組み込まれて我々の前に姿を表さなければなら

らない。面への統合が強力なほど、形は現象として統一的に語り始める」(強調金田)。

ここで語られているのは、いったん輪切りにされて切れ切れになった面現象の群れが(本章の前項 i の最初の段落の傍線部)、ふたたびひとつの立体に、ただし「平面としての立体」に復帰するパラドキシカルな過程である。それはイメージに頼ればこう説明できる。雪の塊がこちらに向かつて転がって、転がりながら手前にあるものを次々に巻き込んでだんだんと大きくなる、そんなイメージをここに読むことができる。文章としては、「立体的な形の、より大きな立体的な形への統合」というくだりがまさにそれであり、その繰り返しが物体の本来の状態を復活させるというのである。

雪だるま的イメージは明快ではある。だが問題は一見明快なこの文章のパラドキシカルな性格にあり、ここでパラドキシカルとは平面と立体のパラドクスを謂う。なぜなら、この場面は輪切り面たちから立体が復元する場面はすなわち、引用の最初の下線部が復元の最終段階を「一つの像現象〔平面現象〕」と言っていること、もう一つは逆に、最後の下線部が立体のこの進行全体を「面進行〔Flächengang〕」と呼んでいることである。面と立体がパラドキシカルに反転を繰り返すのである。

ここにあるのは、徐々に大きくなりながらこちらに迫り来る立体的な雪の塊たちが、ことごとく平面という仮面をかぶっているという奇怪なイメージである。立体なのに平面、平面なのに立体という逆説性は、引用文のなかの四角の枠を付した「目を転じて〔umgekehrt〕」の前後で、短い傍線を付した「平面性」と短い傍線を付した「立体的性」の間で、ヒルデブランドの筆が揺らいでいるこ

とによく現れている(一九四〇年にナチスに追われ自殺したユダヤ人の批評家、カルル・アインシュタインをキュビスムに導いたのがヒルデブランドのこの奇怪でパラドキシカルなイメージだったことを言添えておこう⁽¹¹⁾)。

(iii)〔面層〔Flächenschicht〕〕パラドクスは、『形の問題』の第V章に登場する言葉、「面層」で頂点に達している。面は二次元層は三次元だから、面層は矛盾概念と言わざるをえないが、造形芸術一般の可能性はまさにこの矛盾概念に依存している。

最初にヒルデブランドはこう設定する⁽¹²⁾。「二枚の平行なガラス板を思い浮かべ、その間にガラス板と平行になるように人体を挟み、その一番外側の点が両方のガラス板に接するようにせよ」と。

つまり彼は人体を直方体でコンパクトに囲むことである。そのとき二つのことが起こるのだが、次の引用文の傍線部に注意されたい。「こうして次の〔二つの〕ことが起こる。一方では、ガラス板を通して前方から見れば、人体は、統一ある面において、それとわかる〔Kennlich〕対象像としてのまとまりを堅持している。しかし他方では、〔たしかに〕人体の容量は依然として錯綜してはいても、その容量の把握は、人体が占める〔ガラス板で挟まれた〕全体空間で決まる単純な容量の把握に置き換わっている」と。ヒルデブランドは、直方体で囲むことによって人体が、矛盾を孕みながら一方では平面として、他方では空間として見え始めると言うのである。彼はそれを、「このとき」人体はいわば均等な奥行量を持つ面層〔平面にして空間であるもの〕の中で生きている」と総括している(本段落は強調金田)。

まとめよう。『形の問題』が「遠隔像」、「純粹鏡像」などの生理学的概念を擁するのは事実である。したがって生理学者ヘルムホルツが『形の問題』に及ぼした影響は否定のしようもない。しかしいま見たように、ヒルデブラントが造形芸術の本質を、輪切りがもたらす平面群の、立体への復帰過程のなかに見た限りにおいて、それはヘルムホルツの「虫」が卵の表面世界を認識するのと同型だし、水面を凝視するミケランジェロの意識とも同型である。ヒルデブラントの美学の根底にある世界観は、「人は、二次元的存在として、三次元的世界を眺めやっている」という風に解することができるかもしれない。だがそれは生理学者ヘルムホルツではなく、数学者ヘルムホルツという補助線を引いて初めて見えてくる世界観なのである⁽¹³⁾。

第三章 二つの世紀末

『形の問題』はどんな思想とどんな外的関係を結んでいたのか、これが本論文の第二のテーマである。だがこの問題を扱うには「望遠鏡」と「虫眼鏡」の両方が必要になる。

(一) 「直観の直観主義」と「直観の論理主義」 哲学史の望遠鏡を十八世紀に向けてみよう。『形の問題』の百年前、すなわち十八世紀の終わりに、カントとライプニッツ派の間に論争が勃発したが、対立の核心は空間の基礎を「直観」に置くか、「直観と概念」に置くかの違いにあった⁽¹⁴⁾。暫定的に前者を「直観の直観主義」、後者を「直観の論理主義」と呼ぼう。この対立が十九世紀にも命脈を保つ

ていたことは、ベクトル理論を創始した数学者ヘルマン・グラスマンの存在が物語っている⁽¹⁵⁾。彼は論文「幾何学的解析」(一八四七)の中で、カントをライプニッツ的に再解釈することでだんの対立の無害化に成功したのだった。

だが対立が数学的に無害化されても、哲学的対立自体が消えるわけではない。

そこで再び十九世紀末に話を戻す。ヒルデブラントに『形の問題』の草稿を見せられたコンラート・フィードラーは、そのなかの「直観カテゴリー (Anschauungskategorie)」という露骨に非カント的な言葉に違和感を表明している⁽¹⁶⁾。それはカントの図式、つまり概念に直観を対応させるカントの図式ではない。ヒルデブラントの言う「直観カテゴリー」とは、「直観と直観を結びつける意識作用」を謂い、先の輪切り理論に引き寄せればこう言える。物を輪切りにすることで生成される複数の面が、再び立体現象に復帰するには、面直観と面直観の再結合が必要だが、その結合を管理する意識作用が直観カテゴリーなのである。これは、直観それ自体が他の直観と繋がるための論理的コネクターを内蔵しているという主張であり、思想としては非カント的なライプニッツ主義に近く、数学的には空間を直観から分離して「演算」に置き換えたグラスマンに近い。その意味では、ヒルデブラントの立場を大きく「直観の論理主義(ないしは演算主義)」に包摂することが許されるだろう。

そこで問題はこうである。十八世紀末、ライプニッツ派の「直観の論理主義」にはカントという眼前の敵がいた。では百年経った十九世紀末、ヒルデブラントの「直観の論理主義(演算主義)」にはどんな敵がいたのだろうか。つまり彼が敵対する十九世紀末の「直観

の直観主義」(在るとして) はどんなものだったのか。それをヒルデブラントに反対したフィードラーに求める手もあるが、私はより解像度の高い議論を求めている。そこで私が採るのは人間心理の疑を覗き込む「虫眼鏡の手法」である。

(ii)「予知夢」一九〇七年、ヒルデブラントの知人の女性作家イゾルデ・クルツは、彫刻家の六十歳を記念して彼の評伝を雑誌掲載したが、そのなかで彼女は、ヒルデブラントが一八九五年のフィードラーの転落死の二週間前に見た夢を報告している(17)。ヒルデブラントの予知夢はこうである。

「フィードラーの急死の直前にこんな夢を見た。悪漢 (ein furchtiger Kerl) が身も軽く部屋に侵入し、彼の頭部に致命傷を加えようとしたが、自分が割って入って事なきを得た。夢から十四日後、眩暈か足を滑らせたか、フィードラーは窓から転落して致命傷を負った。私が屋敷を辞したときは元気だったのに、ふと思いついて戻ってみると、夢の告知どおり彼は頭部を砕かれて路上で死んでいた。」

この文章について私はこう思う。出来すぎた話は「作り話」というのが通り相場である。ヒルデブラントの予知夢の「悪漢」の正体に興味津々な社交界が、かねて噂の、ワグナー側近の指揮者ヘルマン・レヴィとフィードラーの妻マリーのフィードラーに対する不誠実、彼らの早すぎる再婚、そして二人がフィードラーの遺産でガルミッシュ・パルテンキルヒェンに建てた「城」に思い至るのに時間はかからない。現にこの予知夢話はマリーに対する個人攻撃に発展している(18)。

だがそれだけだろうか。レヴィがワグナーのバルジファルの初演(二八八二年)の指揮者だったこと、マリー・フィードラーがそのバルジファルの初演の舞台衣装のデザイン担当を務め、「バイロイトの女王」として振舞っていたことを思い起こせば、社交界の眼が「悪漢」の正体を求めて、レヴィを超え、マリーを超え、遅かれ早かれ「バイロイトの奥の院」に届くのは必定である。実際この予知夢話は、前段のゴシップ事情に通じた人々をターゲットに、バイロイトへの敵意をかき立てるように仕組まれたプロパガンダの疑いが濃厚である。

第四章 チェンバレンとフィードラー

前述のように、「哲学史」という望遠鏡を通して浮かび上がるのは、「ライプニッツ系の空間論に寄り添い、カントの直観理論とは一線を画す」ヒルデブラントの姿であった。一方、ヒルデブラント周辺の人間模様を虫眼鏡的に精査するとき、彼の「敵」として浮上するのは今から示すように「バイロイト」の姿である。

(i)「チェンバレン」十九世紀後半、バイロイトは視覚に関する特徴的なレトリックを生み出している。その主たる語彙はこうである。「眼 (Augen)」、「見る (Sehen, Schauen)」、「直観 (Anschauung)」、「形態 (Gestalt)」、「図式 (Schema)」、「線 (Linie)」、「可視性 (Sichtbarkeit)」。

まずこの語彙群は二人の反ユダヤ主義者、ハインリヒ・フォン・シュタインとリヒャルト・ワグナーによって発明されたとみて大過

ない¹⁹⁾。三十歳で急逝したワグナー家の家庭教師シュタインは、一八八三年に小説『英雄と世界 (Helden und Welt)』を出版したが、それに付されたシュタインとワグナーの二重序文は、前者の「Schauen (観る)」と後者の「Sehen (見る)」と二つの言葉が歌い交わすように設えられている。

さて冒頭の七つの言葉は、実はチェンバレン (Houston Stewart Chamberlain, 1855-1927) の著作『カント』(一九〇五) (以下「カント本」) から私が抜き出したものである²⁰⁾。チェンバレンのカント本 (全七六八頁) は、二十世紀の視覚大全とも言うべく、バイロイトで錬成された「眼」のレトリックの総括たるに恥じない。そこでは、ゲーテから篡奪された一連の視覚系の言葉が、ワグナーの示導動機のごとく全巻を覆い尽くすのである。

チェンバレンはイギリスのカント学者であるが、彼を有名にしたのは一八九九年の大ベストセラー『十九世紀の基礎』であり、そのなかで彼は、人種差別主義者ゴビノーの所説に、ゴビノーになかった反ユダヤ主義を加味して世界中に拡散したのである。母国イギリスを憎悪し、敵国ドイツを熱愛し、ドイツの対イギリス戦争を煽り立て、ワグナーの末娘エヴァの夫となり、やがてアドルフ・ヒトラーに「第三帝国の父」と呼ばれた彼が、事実上、ワグナー亡き後のバイロイトの牽引車であった。

(ii) 「フィードラー」あまり知られていないが、一八九五年の死の直前まで、ユダヤ人コントラート・フィードラー²¹⁾ は反ユダヤ主義者チェンバレンと肝胆相照らす仲であった。二人の親交を物語る手紙が現存するが、チェンバレンの一八九三年一月十三日のコジマ・

ワグナー宛ての書簡は看過できない²²⁾。「フィードラー博士の手紙をあなたに送ってあげましょう。とてもユニークな人ですね。ちゃんとしたドイツ人なら、なんとというか客観的なところがあるでしょう。ユダヤ人に囲まれていてもね。彼は実証的なもの (das Positive) が怖いらしい。ずっとFを一本釣り (herausangeln) したところだと思いますが、飼うのは (halten) 大変そうです。」(強調金田。Fと
いう表記は原文のまま)

「一本釣り」だの「飼う」だの動物の比喻は穏やかでないが、それは具体的には何のことだろうか。

フィードラーのワグナー熱は筋金入りである。実際、彼と妻マリイは、有名な一八七六年の第一回バイロイト音楽祭に参加し、ニーチェに触れる当時の書簡も残っている²³⁾。『造形芸術作品の判定』のフィードラーと、ワグネリアンのフィードラーは、一八七六年に一緒に (双子のように) 生まれたのである。

ところでヒルデブランドは人も知るワグナー嫌いであった。ワグナーへの罵詈雑言を書き出すと、「音楽とドラマの不純な融合」から「知識で捏ね上げ直観を欠く世界観の人」ときて、「彼は人間として信用できない」、「彼の目には誠実なものがない」といった塩梅である。だが敬愛するフィードラーはそのワグナーに耽溺している。一八七八年、気持ちを抑えかねたか、ヒルデブランドは別の話にかこつけてフィードラーにこう告げている。「ちゃんと側にいてくれれば、大波に飲まれても別れ別れにならないものです」(Jachmann, S. 108)。しかしその後も、フィードラーはワグナーを礼賛する論文や書簡を彼に送りつける始末である²⁴⁾。この点で彼らは遂に話がかみ合わない。ちなみにフィードラーは、SchauenとSehenが歌

い交わすシュタインのあの『英雄と世界』を読んでいるが、友人たちはそれに懸念を表明しないではいられなかったのである⁽²⁵⁾。

さて「フィードラーの一本釣り」について、私はこう考える。いまだきチェンバレンの「カント本」など読むものはいない。しかし第一に、当時のカント学者たちの同書への評価は、彼がドイツ皇帝の友人ということもあり、今では信じられないほど高かったし、第二に、私の眼にも彼のカント論がモダンに映ることは認めざるを得ないのだが、それでも第三に、彼には何とも言えないいかがわしい空気が否めないのである。彼の存在は二十世紀初頭のカント研究の「不都合な真実」かもしれない。

そこで「ヒルデブラントの敵は誰か」というくだんの問いである。そもそも一九〇五年のチェンバレンの「カント本」からして、カント哲学のワグナー的変奏（露骨に言えば改竄）の疑いが濃厚である。だが美学固有の問題としてさらに重大なのは、「カント本」の第二章、すなわちフィードラーの名前が一度も出ない「カント本」の第二章「レオナルド」が、実はフィードラーの『芸術活動の起源』（二八八七）の剽窃ではないかという疑いである。一般に剽窃の立証は容易でないが、チェンバレンのいつもの生気ある文章が影を潜め、書き写すことのがやましさを、文章が凡庸になっていくことだけは指摘しておこう（フィードラーが彼の前で自らの文章を朗読したのは一八九〇年であり（注⁽²⁶⁾）、それは「カント本」の執筆開始時期と重なる）。だがこの剽窃と覚しき行為には二段構えの罫がある。実際、「チェンバレン・シュタイン・ワグナーの眼 (Auge) の理論」に「フィードラーの眼 (Auge) の理論」が組み込まれることによって、当然のように読者は「チェンバレンを読むとき自動的にフィードラーま

で読んでしまう」わけだが、そこにある反転が加わることによって読者は、「フィードラーを読むとき自動的にチェンバレンまで読んでしまう」可能性に曝されるのである。この寄生行為こそが「Fの一本釣り」の中身ではないだろうか。

もちろんユダヤ人フィードラーをプロトナチスとするのは、カントをプロトナチスとするのと同様、無理筋の議論である。しかしチェンバレンたちが公然たるプロトナチスである以上、この危うい交流は、以後、陰に陽に政治的・思想的そして美学的な化学反応を各所で引き起こしてきた可能性が非常に高い。

確認する。私はヒルデブラントの「政治的な敵」を探している。しかし彼がそれを論文として公にしなかったたので、私信などを使って掘り手からこの問題に取り組んでいる次第である。

ことの性格上、憶測を交えざるをえないのは遺憾だが、私は、ヒルデブラントがクルツに評論を書かせた時点で（一九〇七年）、彼はチェンバレンによるフィードラーの剽窃（一九〇五年）に気づいていたと思う。そのとき、彼はフィードラーがバイロイトに二回殺されたと見ていたに違いない。一回目はマリーによってパーソナルに、二回目はチェンバレンによって社会的に（マリーとチェンバレンが存命なのに、クルツに書かせたあの極めて無礼な予知夢の話は、死せるフィードラーに代わってヒルデブラントが彼らに放った報復の矢ではなかったか）。

さて一般に著名人はそうだが、ヒルデブラントの周辺で起こった個々の出来事は、個人的と社会的の二側面を併せ持つ。ヒルデブラントの「ワグナー、チェンバレン、マリー」への個人的な憤りは、一八九四年からのドレフュス事件が象徴する、ヨーロッパで強まる

ユダヤ人迫害に対する彼の社会的身振りと連動している。その証拠を一つ挙げよう。一八八〇年、ユダヤ人排斥を唱える極右の歴史学者ハインリヒ・トライチケ⁽²⁶⁾と、古代ローマ史の泰斗テオドール・モムゼンの間に論争が起こったが⁽²⁷⁾、一八八九年、ヒルデブランドはローマ風庭園を擁するミュンヘンの自邸に、ユダヤ人との共生を唱えたそのベルリン大学教授テオドール・モムゼンを招待したのである。これは明らかにユダヤ人排斥論への対抗メッセージである。彼のなかには、いまだ萌芽的とはいえ、プロトナチスへの政治的対抗意識が芽生えていたのであり、ただ彼はそれを論文ではなく、新聞の著名人の動静欄などを利用して表現したのであった。

最後に先の補助線Ⅰ「ヘルムホルツの輪切り論法」とこの補助線Ⅱ「プロトナチス」を媒介しておこう。私はすでに、十八世紀末のカントと反カント派の、空間は「直観」なのか「直観と概念」なのかという対立に言及したが(Ⅰ)、この対立は十九世紀末以降、新しい政治的パラメーターのもとで(Ⅱ)、一度ではなく、二度にわたって自らを反復している。

二度目の反復はよく知られている。一九三〇年代、ナチスの物理学者レーナルト⁽²⁸⁾は『ドイツ物理学 (*Deutsche Physik*)』誌上で、アルベルト・アインシュタインの相対性理論を、ゲーテのエーテル理論系の「直観」概念を使って攻撃したのだった。

注

(1) Adolf von Hildebrand (1847-1921). *Das Problem der Form in der bildenden Kunst*. 初版一八九三年、最終決定版一九〇三年。使用したのは次の『著作集』のG版。Adolf von Hildebrand *Gesammelte*

しかし私はそれに先じて一回目の反復があったことに注意を喚起したい。世紀転換期における、「チェンバレンたちのプロトナチス」と「ユダヤ人ヒルデブランド」のあの対立がそれである。たしかにナチスという変数を含む点でそれは政治的対立ではある(Ⅱ)。だが両者の対立の論理基盤を見れば、ことの本質は、チェンバレンたちが(彼らが理解した限りでの)カントの衣鉢を継いで「直観の没概念性」を唱えたこと、またヒルデブランドが(おそらくアロイス・リール経由で彼が理解した限りでの)ライプニッツ派の衣鉢を継いで「直観の概念性」を唱えたことに求めなければならない(Ⅰ)。その意味での対立は十八世紀末の対立の「反復」なのである。

私は以上の議論がいまだ疎略であること、また「プロトナチス」や「ユダヤ人」という概念も曖昧であることは承知している。しかし直観をめぐる抗争図式に限れば、十八世紀末と十九世紀末は大枠では一致するのであり、おそらくそれは偶然ではない。一九三〇年代のそれに比べてあまり知られていないが、十九世紀から二十世紀への世紀転換期にも「直観」と「演算」の対立があったという事実は、十分、記憶に値するだろう。

以上が、『形の問題』を内在的、外在的に理解するために私が引くと約束した二本の補助線である。

Schriften zur Kunst, bearbeitet von Henning Bock. Köln und Opladen, Westdeutscher Verlag, 1969. 以下HGSと表記。なお本論文中の翻訳はすべて金田による。段落表記は日本語訳に合わせた(『造形芸術における形の問題』、加藤哲弘訳、中央公論美術出版、一九九三年)。(2) Conrad Fiedler (1841-1895), Hermann von Helmholtz (1821-1894).

- (3) Staudigl, Rudolf: Grundzüge der Reliefperspektive. Wien. L. W. Seidel und Sohn. 1868. Brücke, Ernst: Bruchstücke aus der Theorie der Bildenden Künste. Leipzig. Brockhaus. 1877. の第二章 'Die Reliefperspective.'
- (4) ヴェルブリン宛て書簡 (一八九三年七月十五日)。Adolf von Hildebrand und seine Welt, Briefe und Erinnerungen, besorgt von B. Sattler. München. Callwey. 1962. (以下 Sattler と表記。Bernhard Sattler と彫刻家の孫。)
- (5) ① Helmholz, Hermann von: Über den Ursprung und die Bedeutung der geometrischen Axiome (幾何学的公理の起源と意味)。In: Vorträge und Reden. Braunschweig. Vieweg und Sohn. 1884; Bd. 2. 一八七〇年の講演。 (The Origin and Meaning of Geometrical Axioms. Mind. Vol.1, No.3, 1876.)
 ② Ibid: Optisches über Malerei (絵画の光学)。一八七二年から一八七三年の講演。所収は①に同く。
 ③ Ibid: Die Thatsachen in der Wahrnehmung (知覚の諸事実)。一八七八年の講演。所収は①に同く。
 ④ Abbott-Abbott, Edwin: Flatland (平らな国)。London. Seeley. 1884.
 ⑤ Hinton, Charles Howard: A Plane World (平面世界)。London. Swan Sonnenschein, Lory & Co. 1884.
- (6) ヴルデブラントのフィードラー宛て書簡 (一八七六年八月)。Adolf Hildebrands Briefwechsel mit Conrad Fiedler. Hsg. Günther Jachmann. Dresden. Wolfgang Jess. 1927. S. 63. (以下 Jachmann と表記)
- (7) Helmholz, H.: Vorträge und Reden. SS. 8-11.
- (8) HGS. SS. 356. 私は哲学的になつたこの文章に、当時キールまたはハレ大学教授だったアロイス・リール (Alois Rehl. 1844-1924) の影を感じる。新カント派の先駆けリールはヒルデブラントの友人であつた。
- (9) Edwin Abbott-Abbott (1838-1926). 教育者・神学者・風刺作家。Charles Hinton (1853-1907). 数学者 George Boole の娘婿で数学者。彼らの
- S F 作品の道徳思想・神学思想との繋がりについては次を参照。アボット・アボット著、イアン・スチュアート注釈、富永星訳。『フラットランド 多次元の冒険』。日経 B P。二〇〇九年。その十九章の注。
- (10) 『形の問題』第四章段落一。加藤訳はヒルデブラントの Erscheinung を「見かけの姿」と訳すが、私は彼がリール経由でカントに精通していたと見て、この訳語に賛同しない。『形の問題』は、造形芸術によつて「自然における現象」が「芸術における現象」に転移すると何度も主張するが、それは、(カント哲学で) 知覚経験の基層をなす「現象」までが、芸術によつて書き換え可能だというラジカルな認識を含む。しかし右の訳語はその点を曖昧にするのである。(現象が光のみで生成される世界のイメージも参照。Jachmann. S.206.)
- (11) Carl Einstein (1885-1940). ト記を参照。Kiefer, Klaus: Diskurswandel im Werk Carl Einsteins. Tübingen. Max Niemeyer. 1994.
- (12) 以下の三つの引用は『形の問題』第五章段落一から。
- (13) ヒルデブラントは造形芸術の座を「眼」から「脳」に移した最初の人ではないか。輪切りによる空間認識は眼には負担が重すぎる。
- (14) ライプツ派の立場からもうひとつも優れた空間論を展開したのは Johann Gebhard Ehrenreich Maaf (1766-1823) である。ハレ大学教授。
- (15) Hermann Grassmann (1809-1877). ベクトル理論を創始した数学者。著作。Geometrische Analysis (幾何学的解析)。Leipzig. Weidmann. 1847. 主著は Ausdehnungslehre (外延論)。Berlin. Ersin. 1862.
- (16) フィードラーの書名込み。「直観カテゴリー・「直観」法則。そんなものがあつた。(Eine Anschauungskategorie-Gesetze sind?)」。HGS. S. 527. なお最終稿でこの言葉は消えるが、論旨に特段の変化はない。
- (17) Iside Kurz. (1853-1944)。Adolf Hildebrand Zur seinem sechzigsten Geburtstag. Deutsche Rundschau. Okt. 1907. S. 121. フレーヌとフィードラーとヒルデブラントがフィレンツェで共同生活していた頃からの友人。私には彼女が三人の「女子マネ」に見える。若い頃、カール・マルクス事務所に語学担当で勤務したことがある。

彼女は「マレーズ、フィードラー、ヒルデブランドの三位一体」とか「精霊 (Geist) フィードラー」というフィレンツェ期の友人の発言を引くが (S. 118)、三人を神格化する意図はない。飽くまでも力点は Geist にあり、作家性を持つ二人が、作家性のないフィードラーの仲介を必要とした事実を比喩的に表現したまでである。

だが芸術家の聖人視に傾く時流の中で、クルツの文を三位一体に重心を移して読み、三人組の神格化と疑われる路線に舵を切ったのはクルマン・コネルト (1881-?) である。次の学位論文を参照: Konnerth, H. *Gesetzlichkeit der bildenden Kunst*. Berlin, Ebering, 1908, S. 27.

- (18) Hermann Levi (1839-1900). ワグナーが重用したユダヤ人の指揮者。なお彫刻家と友人たちはフィードラーが存命の頃から彼の妻マリイ (Mary, 1854-1919, ユダヤ人) に厳しい眼を向けていた。詳細については次の資料を参照。Gertrude Quast-Benesch; Anton Bruckner in München. Hrsg. Anton Bruckner Institut Linz, Tutzing, 2006, 26-27に SS. 160-172.

- (19) Heinrich von Stein (1857-1887), Richard Wagner (1813-1883).

- (20) Chamberlain, H. S (1855-1927); Immanuel Kant. *Die Persönlichkeit als Einführung in das Werke*. München. Bruckmann, 1905.

- (21) 日本では知られてないが、マレーズ、フィードラー、ヒルデブランドはユダヤ人である。Sattler S. 765, 次を参照。Wegener, Franz; *Der Vederemo-Bund. Kulturförderverein Ruhebet*. 2011. 第二三節。

- (22) Cosima Wagner und Houston Stewart Chamberlain in Briefwechsel 1885-1908. Hrsg. Paul Pretzsch. Leipzig: Reclam, 1934. 彼のロジマ宛の書簡をあと二つ挙げておく。

「昨日、フィードラー博士がみんなの前で朗読してくれました。あなたにもお薦めの内容でしたよ」(一八九〇年三月二十日)。「最後にゲッツの公演を見たときは、亡くなったフィードラーと一緒にでし

た。途中で顔色が悪くなって辛そうだったので、観劇もそこそこに二人で劇場を出ました」(一八九六年二月二十六日)。

- (23) フィードラーの書簡。「来週ヴァイストロップに行き、それからバイロイトに行きます。芸術とは何かを知るにはフリードリヒ・ニーチェの〈バイロイトのリヒャルト・ワグナー〉をお読みなさい」(一八七六年八月二日、ヒルデブランド宛)。Jachmann.

- (24) ワグナーを論じた公開書簡 (未発表) が重要。Konrad Fiedler, *Briefe aus Bayreuth*. I (1891). II (1894). Konrad Fiedler *Schriften zur Kunst*. II. Hrsg. Gottfried Boehm. München. Fink, 1991. 本著作集はワグナー書簡を抄訳に止め、フォントも落としてゐる。編者は「不出来だから」と言うが、出来不出来は読者が判断する。私には「可視性の人フィードラー」と「ワグネリアン・フィードラー」は不整合に見えるが、前者だけを持って嗤し、後者を黙殺する理由は何だろうか。不整合も込みでフィードラーはフィードラーだっただろうに。

- (25) 「フィードラーに『英雄と世界』を勧められましたが、まだ読んでいません。これ、ロジマも一枚噛んでいますね。フィードラーはたらし込まれたのよ (sich verführen lassen)」(一八八九年八月七日、女性の友人エリザベート・フォン・ヘルツォーゲンベルクのヒルデブランド宛の書簡「Sattler」)。

- (26) Heinrich von Treitschke (1834-1896). ベルリン大学教授。

- (27) Theodor Mommsen (1817-1903). ベルリン大学教授。ヒルデブランドはモムゼンの『ローマ史 (*Römische Geschichte*)』(1854-85) に目を通している。Jachmann, S. 285. (なお私は「プロトナチス」という言葉を狭い意味、つまりナチスに先行し、根本的ドグマ「反ユダヤ主義」をナチスと共有し、しかもナチスとの歴史的的政治的紐帯を具体的に確認可能な範囲で使う。だからワグナーやチェンバレンはそうであり、カントやニーチェやフィードラーはそうでない)

- (28) Philipp Lenard (1862-1947). 一九〇五年にノーベル物理学賞を受賞。